

肄業餘稿

草庵池田絹著

※原文 池田草庵先生著作集

書き下し文 肄業餘稿 岡田武彦等訳注

訳 池田草庵先生に学ぶ会

余、毎月一兩次、諸生を召して業を肄^{なほ}わしむ。蓋し口中自^{みづか}ら語を占^のべ、彼をしてこれを書かせしめ、以つてその句を作り字を用ふるを見る。因つてこれを指揮して、其の占ぶる所の語、時に臨んで撰出し、意に任せてこれを陳^のぶ。始め定例なし。要は諸生をして稍^{やや}其の文を作るの法を解せしむるにあるなり。然り而してこれに由れば、亦以つて山間平日書を読み学を講ずるの風趣を見るに足る。則ち復た抹殺廢棄し、弁^{べん}髦^{ぼう}のごとくこれを視るべからざるなり。

安政七庚申正月 青谿居士 緝^{しる}題す。

余毎月一兩次、召^レ諸生肄業、蓋口中自占^レ語、使^レ彼書^レ之、以見^レ其作^レ句用^レ字、因指^レ揮之、而其所占^レ之語、臨時撰出、任意陳^レ之、始無定例、要在^レ使^レ諸生稍解^レ其作文之法^レ也、然而由^レ此、亦足^レ以見^レ山間平日讀書講^レ学之風趣矣、則不^レ可復抹殺廢棄弁髦視^レ之也

安政七庚申正月 青谿居士緝題、

【訳】

私は毎月一回か二回、塾生を集めて課業を与えた。それは私が自分で話し、塾生にそれを書かせて、その文章や語句の用い方を指導した。こういうことをやって、その時話すことは時には考へたり、頭に浮かんできたことを話したりした。初めは決まりもなく、とにかく塾生に文の作り方をわからせようとした。しかしながら、これは山間のくらしの中で、普段から読書をし学問を教えるという趣がうかがえるものである。これらのものを取るに足らないものとして捨ててしまうようなことはしないでおく。

安政七（一八六〇）年正月 青谿居士 緝（47歳）